

私の研究遍歴 ー人文地理学のアイデンティティ再考ー

阿部和俊（愛知教育大学・名誉教授）

「私の研究遍歴ー人文地理学のアイデンティティ再考ー」というテーマで発表をする機会をいただいたので、これまで過ごしてきた時代や友人とのこと、地理学とくに都市地理学との関わりについて報告した。私は先に「人文地理学のアイデンティティを考えるー都市地理学を中心にー」という小文を『人文地理』(2007)に発表しているので、今回の報告はそれをさらに包括したものでもある。

報告は①名古屋大学の学生時代、②名古屋大学の院生時代、③愛知教育大学に就職して以後ーソルボンヌ留学を境に二分ーに分けて行なった。学生時代は、ベトナム戦争や大学闘争・学園紛争の時代で落ち着かないものであった。教養部時代には自然科学系の単位取得に苦労したこと、羽仁五郎の『都市の論理』(1968)がベストセラーとなって「都市」なるものが研究のテーマになるのかというようなことを思ったりしたことが記憶にある。

学部の授業では、応地利明先生担当の「フランス地理書講読」から強烈な印象を受けた。フランス語は大学受験時に深い考えもなく選んだ第2外国語にすぎないのだが、この授業で杉浦芳夫氏と知り合い、ポール・クラヴァルを教えてもらうなど影響は大きかった。人生における偶然性を思わざるをえない。学部時代、北九州5市合併のことを調べたりしたが、卒業論文では経済的中枢管理機能からみた都市分析に取り組んだ。卒論は「日本の主要都市における経済的中枢管理機能に関する研究」として『地理学評論』(1973)に掲載されたが、自分の論文でありながら、このタイトルには違和感があって、後に都市地理学は「都市を」研究するものなのか「都市で」研究するものなのか、ということを考える素地になった。

大学院の修士論文では、経済的中枢管理機能を指標として日本の都市を歴史的に分析することを決めていたが、同時に日本の中心地研究・都市の順位規模研究・都市の内部構造研究に疑問を抱いていた。いずれも欧米で確立された理論の日本への適用であるが、ほとんどの研究が日本でもあてはまるという結論になっていることに疑問を感じていたからである。このことは後々、海外研修や留学時の体験で自分の疑問が正しいという確信を得るにいたった。

ソルボンヌへの留学で印象に残ったことはクラヴァル先生の研究生産力である。研究は連続して常に発表し続けることの重要性を身にしみて感じた。多産性と連続性である。

現在まで経済的中枢管理機能を指標とした世界の都市体系研究が私の関心の中心であるが、そこに共通性はあるのか、日本の特異性はあるのかといったことを見極めたいと考えている。同時にやはり都市地理学とは「都市を」地理学的に研究するものではないかと考え続けてもいる。